

## - 5 世紀の日本

古墳の中から見つかった品々から古墳の年代を推測することができる。3 世紀中頃から 4 世紀にかけての古墳に一般に見られるものには、勾玉と呼ばれる石の装飾物や儀式用銅鏡などがある。5 世紀までには、鉄かぶと、鎧、道具などが多く見られた。この違いには、金属加工技術が発展したこと、宗教と闘争に関わる文化的価値が変化したことの両方が現れていると考えられる。

博物館には近隣の茨木市にある古墳から発掘されたいくつかの大きい丸い銅鏡など、5 世紀の人工遺物がいくつも展示されている。鉄鋌という鉄板や鉄の武具もまた展示されている。当時、鉄は外国から輸入する必要があったため、鉄製品が埋められているということから埋葬された人が裕福だったことがわかる。

古墳の外側を飾った埴輪と呼ばれる素焼きの焼き物も博物館のいたるところに展示されている。そのデザインは時代とともに変化し、単純な円筒やつぼは、人間、動物、建造物など実世界にある複雑な形態となった。博物館の中でも称賛に値するものは大きな家の形をした 4 世紀の埴輪だ。70 センチあり、切妻屋根の高床式の住居を表わしており、中には小さな寝どこまである。外側には赤く塗られた形跡が見られ、盾の模様が彫られている。注意深く細部を見ると、高貴な家族の本当の家をモデルにしたようで、当時の建築についての貴重な情報が得られる。